國學院大學学術情報リポジトリ

万葉集と門前の歌：攔門の習俗との関わりから

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 曹, 咏梅, Cao, Yongmei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000054

万葉集と門前の歌
―攔門の習俗との関わりから―

曹 咏 梅

一、はじめに

『万葉集』には「門」をめぐる恋歌が多くあり、家持は「娘子の門に到りて作れる歌」を題とする歌を二首残し、湯原王も娘子との贈答歌に門前の歌を詠んでいる。筆者は以前中国の恋愛活動や婚姻習俗の門前の歌文化と比較しながら、こうした天平時代の門前の恋歌の生成は、ある習俗の知識を基盤にしていることを述べてきた[1]。だが、家持や湯原王が理解しているその習俗の知識とは、漢籍から獲得した婚姻習俗の知識が基盤にあるのではないかと思われる。したがって、本稿では中国少数民族の恋愛活動や婚姻習俗の中で展開する門前の歌を取り上げ、さらに中国文献における攔門の習俗の痕跡を辿りながら、論を進めていきたい。

二、万葉集の門前歌

『万葉集』の中には、「門」をめぐる恋歌が類型的に存在することが確認できる。たとえば、「妹が門」というのは、男の恋い慕う場所、また男女の出逢う場所であり、それがやがて妹を

象徴する歌語となったと考えられる。以下に取り上げる家持や湯原王の門前の恋歌は、明らかに門前の恋をテーマとした恋歌の中の一首と位置づけるべきものであり、門前の唱歌であるといえる。[2]

家持の門前の恋歌は、「娘子の門に到りて作れる歌」を題とするものであり、次のように歌われている。

かくしてやなほや退らむ近からぬ道の間をなづみ参来て
（巻四・七〇〇）

妹が家の門田を見むとうち出来し情もしるく照る月夜かも
（巻八・一五九六）[3]

七〇〇番歌は、遠い道のりを妹（恋人）のもとへと訪れたのだが、「なほや退らむ」と門前で帰されるであろう懸念を訴える。また一五九六番歌は、妹の家の門前の田を見に出かけた時の空に照る月を詠む。このほかに、家持は紀女郎と贈答の中で門前で帰されることを以下のように詠んでいる。

吾妹子が屋戸の籬を見に行かばけだし門より返してむかも
（巻四・七七七）

ぬばたまの昨夜は還しつ今夜さへわれを還すな路の長道を
（巻四・七八一）

題詞によると、この歌は「大伴宿祢家持の、また紀女郎に贈れる歌五首」の中の一首目と五首目である。題詞に「また贈れる」とあるように、家持と紀女郎はこれ以前にすでに歌の贈答を行っていることが知られる。そこでは「うづら鳴く故りにし郷ゆ思へども何そも妹に逢ふ縁も無き」（巻四・七七五）と、奈良の旧都の頃から恋して来たのに逢うすべがないと訴え、これに対して紀女郎は、「言出しは誰が言なるか小山多田の苗代水の中淀にして」（巻四・七七六）と、「先に言い寄ったのはどなたかしら、途中で途絶えたりして」と切り返す。紀女郎は、初めに家持が言い寄ったのに、その後消息を絶った不実な男として責め立てる。そのような問答を経て五首を贈ったことからみると、七七五番歌から七八一番歌までは一つの歌群と考えるべきである。七七七番歌では「あなたの家の間垣を見に行ったらおそらく門から私を帰してしまうだろう」と歌い、次の歌では、「うつたへに籬の姿見まく欲り行かむと言へや君を見にこそ」（巻四・七七八）と、あなたの家の間垣を見に行こうとしたのではなく、あなたに逢いに行こうとしたのだと歌う。つま

り家の間垣を見に行くというのは、あなたに逢いに行くためなのだと、相手に本来の訪れの理由を説き、相手に恋心を訴え挑発するのである。そして最後には「昨夜も帰したから今夜は帰さないでください」と七七七番歌と対応しながら、門前での歌で歌い納めている。家持は紀女郎の咎めに対して、門前までに到ったことを詠むことで、自分の誠意を表したわけである。また「門より返してむかも」「われを還すな」と、相手が自分を帰すことを想定して詠み、相手の歌を引き出そうとしたのであろう。

また湯原王の歌も、同様な方法で門前の歌を娘子に歌いかける。湯原王は娘子との贈答歌の中で、まず最初に、

表辺なきものかも人はしかばかり遠き家路を還す思へば
（巻四・六三一）

と訴えるのであり、「愛想もないことだな、この人は。これほど遠い家路を訪れたのに、門の前で帰されることを思うと」と詠む。この手法は、相手の娘子に拒絶され帰されるるであろうことを先に予測し、帰された時のことを怨むのである。こうした相手に断られるであろうことを想定して詠む点は、先の家持と共通する。湯原王と娘子贈答歌群は六三一番から六四二番歌まで続き、一定のテーマに沿った恋歌が歌われながら、物語が紡がれている。このように贈答歌の「門より返してむかも」「われを還すな」「遠き家路を還す」などと、門前で帰される状況を詠むのは贈答の時の歌い方の形式として存在したことが確認できる。(4)

三、中国少数民族の門前の対歌

このような『万葉集』の門前唱歌は、中国少数民族の習俗の中に多々見られる。中国少数民族の生活の中では「門」と関わる風習が恋愛や婚姻習俗の中に残されて、多くは対歌（歌掛け）活動とともに存在している。まず社交的な恋愛活動の中に展開されている門前の対歌についてみてみたい。中国西南、南部方言地区の侗族は「行歌坐夜」という妻問い習俗があり、これは室内で対歌を行う習俗であるが、最初の関門が「門」である。女性たちは家の中、つまり門の内側に、男性たちは門の外側にいる。この「門」をくぐり抜けた男性たちだけが家に入って、女性と対歌を行う資格が得られる。その門前で歌われるのが「喊門歌」であり、まず男性が次のように歌う。

開門羅　門を開けてください、
哥哥有意来烤火　兄はわざわざ火に当たるために来ました、
妹靠火塘一辺坐　妹は暖炉の片端に座って、
還有一辺留給哥　もう片端は兄に残してください。[5]

これに対して、女性は次のように返す。

門外哥　門外の兄さん、
我家柴火没幾多　我が家には柴が多くありません、
你要烤火回家去　火に当たりたいなら家へ帰ってください、
老婆児女在等着　奥さんと子供が待っているのでしょう。

女性たちは柴が多くないことを理由に男性を帰そうとする。男性には「奥さん」がいることを歌うのは、男性が独身かどうか探る方法である。それに対して男性は、

壇有酸魚誰去河里把網撒　瓶に塩漬けの魚があるのに誰が河に行って網を打つのでしょうか。
哥若成双哪有空陪妹坐　兄にもし妻がいたら、妹の傍に座る暇などありますか。
妹屋柴火成了堆　妹の家の柴は高く積んであるのに、
何必小器冷了哥　けちけちして冷たくしなくてもいいのではないですか。

と返す。これに対して女性は、「柴は少しあるが、あまり持ちません。父さんは年老いて弟は小さいです。私はそろそろ寝るので、火種を埋めます。ほかのところの暖炉を探してください。」と歌い返し、男の訪れを断る理由を探すのである。すると男性も負けずに「山には乾いた薪が山のようにあります、兄が手伝って担いで来て下に置きます。妹は火種を埋めて寝ると言うが、火はまだ燃えていますよ。わざと誰かを待っているのではないでしょうか。」と女性の言い訳について切り返し、さらに女性を挑発する。このように女性たちはすぐ門を開けず、いろいろな口実をつけて男性が家に入るのを断り続けるのであ

る。門前での対歌は長く行われる傾向にあり、それを通して男性の歌の能力を判断するのである。男性がうまく返すことができたら、部屋に入ることができる。

また、侗族には寨門（集落の入り口の門）があり、客が村に入る時に攔路という儀礼を行う習俗がある。ここでも客が男性である場合は女性が出迎え、攔路歌を歌う。ここでは寨門を境として対唱を行うが、その基底には「門」が本来外部の人と出会う場所としての認識があるからであろう。北部方言地区の婚姻習俗の中にも、新郎側が新婦を迎えて来た時に、新婦側は村の入り口と家の門で通せんぼを行い、「攔関親歌」が歌われる。たとえば、「門」について盤問（質問）する「攔関親歌」では、まず新婦側の人たちが新婦を迎えに来た人を相手に、

関親人、問你大門的情形　新婦を迎えに来た人よ、門についてお聞きします、
門枋又有幾尺高？　門の高さは何尺ですか？
門閂又有幾尺長？　門の閂の長さは何尺ですか？
左辺把門是哪個？　左で門を守るのは誰ですか？
右辺把門是哪人？　右で門を守るのは誰ですか？

と歌いかけると、新郎側の人たちは、

你要問我大門事　私に門について聞いたら、
我就一二説分明　全部詳しく答えます。
門枋又是五尺高　門の高さは五尺で、
門閂又有三尺零　門の閂の長さは三尺ちょうどです。
左辺把門秦叔宝　左で門を守るのは秦叔宝で、
右辺把門尉遅恭　右で門を守るのは尉遅恭です。[6]

と答える。このように「門」に関していろいろ質問をし、新婦を迎えに来た人たちは全てに答えなければならない。また、南部方言地区では、以下のような歌が歌われる。

主人（新婦側）：　お母さんが娘を育てあげるには本当に苦労しました。
媽媽養女多艱辛
又背又抱長成人　おんぶし抱っこしながら成人までに育てました。

指望姑娘長大敬父母
不願姑娘離鄉嫁外村
若要姑娘嫁外鄉
千年侗礼要遵循
烏飯満盆肉満桶
大猪要有三百斤
四耳酒壇要装満
辦不到就莫進山寨来接親

娘が大きくなって親孝行をすることを期待していました。
娘が家を離れて他の村へお嫁に行って欲しくありません。
もし娘がほかの村へ嫁ぐなら、
千年の侗族の儀礼は守るべきで、
黒いご飯もいっぱい、肉もいっぱい入れて、
一頭の豚は三百斤あるべきで、
四耳の酒かめに酒をいっぱい入れるべきです。
無理ならば村に入って新婦を迎えることはできません。

客（新郎側）：
你們攔路怎不預先透個信
該讓我們早点練嗓音
今天突然遇着衆歌手
就象出殼鶏崽遇老鷹

攔路を行うのになぜ事前に知らせてくれないのですか。
私たちに喉馴らしをさせて歌を練習させるべきでした。
今日突然多くの歌手に出会い、
殻から出てきたひよこが鳶に出会ったようです。

你們左一首来右一首
我們頭髪昏来眼睛冒金星
你們要来攔路我們不知道
道道難題我們実在無法応
若是你們到我寨上来做客
我們早已捧着油茶迎遠親

みなさん左から一首、右から一首、
私たちは頭がくらくらし、目から星が出ています。
攔路を行うことを知らなかったので、
それらの難題にはとても応じることができません。
もしあなたたちがわが村へ客としてくれば、
私たちはとっくに油茶を捧げて親戚を迎えたでしょう。(7)

ここで歌われる歌を全部あげることはできないが、新婦側は贈りものが少ないことや、侗族のしきたりに沿った贈り物を用意することを求めたり、また世の中が不安だとか様々な理由を並べ立て、新郎側の返歌の能力を試すのである。「衆歌手」「道道難題」とあるように、新婦側を代表する歌手たちは様々な問

題を出し、新郎側の知恵や人柄を試すのである。ここですべての歌にうまく歌い返せば、新婦を迎えることができる。

このように、婚姻儀礼の中に見られる門前の習俗として攔門の儀礼があり、新婦を迎える時に新婦側の人がいろいろと質問を行い、新郎側が合格すれば新婦を迎えることができる。また、これとは逆に新婦側が新郎の村に入る時、新郎側が事前にお願いした人が新婦側に対して攔門を行う場合もあり、さらにお祝いにきた客と主人側（新婦側）とが攔門歌を交わす場合もある。こうした婚姻儀礼の中に門前で対歌を行うのはタイ族、モンゴル族、侗族、瑶族、壮族、土家族などの多くの民族に見られ、[8] 侗族のように恋愛習俗や客迎えの儀礼的な場で「喊門歌」や「攔路歌」を歌うのも、源流は「攔門」にあると思われる。広東と広西地域の結婚の風習で攔門の詩歌が詠まれたというのは、清の李調元の『南粤筆記』に「粤俗好歌、凡有吉慶、必唱歌以為歓楽。……其娶婦而親迎者、婿必多求数人與己年貌相若而才思敏給者使為伴郎。女家索攔門詩歌、婿或捉筆為之、或使伴郎代草、或文或不文、總以信口而成、才華斐美者為貴。至女家不能酬和、女乃出閣[9]」とあることからも確認でき、新婦側が歌を返せなくなれば、新婦を迎えることができるという。今日でも多くの地域に新婦側の門前での〈通せんぼ〉の習俗があり、新郎側から彩礼銭（結納の金品）を奪い取る風習が残されているが、これも攔門の名残と思われる。

四、敦煌遺書「下女夫詞」と『遊仙窟』

攔門については、宋の孟元老の『東京夢華録』巻五「娶婦」に「迎客先回至児家門、従人及児家人、乞覓利市銭物花紅等、謂之欄門[10]」と、従者や新郎の家族が新郎の家の門前でご祝儀や引出物をねだることを「欄門」というとある。そして宋の呉自牧の『夢粱録』巻二十「嫁娶」に「迎至男家門首、時辰将正、楽官妓女及茶酒等人、互念詩詞、攔門求利市銭紅[11]」と、楽官妓女などの人が新郎の家の門で詩歌を述べて、攔門を行いご祝儀や引出物をねだるとあり、宋代には攔門がすでに婚礼の中で儀式の一つして存在していたことが知られる。攔門の儀礼は唐代の「障車」にあたるといわれ、[12]『旧唐書』には「往者下俚庸鄙、時有障車、邀其酒食、以為戯楽。近日此風転盛、上及王公、乃広奏音楽、多集徒侶、遮擁道路、留滞淹時、邀致財物、動踰万計。遂使障車礼貺、過於聘財、歌舞喧譁、殊非助感。既虧名教、実蠹風猷、違紊礼経、須加節制。望請婚姻家障車者、並須禁断。」とあり、「障車」が風紀を乱し、礼にそぐわないの

で禁止すべきだと主張する記事が見える。[13]

唐代の攔門の習俗を反映したものとしては、敦煌遺書「下女夫詞」がある。これは唐代の敦煌地域の新婦を迎える時の攔門および鬧洞房（婚礼の晩、親戚や友人が新婚夫婦の部屋に押しかけてからかったり騒いだりする風習）の風俗を反映しているといわれる。[14]「下女夫詞」は前半は児と女との問答の形式で構成されている。

〔児家初発言〕：賊来須打、客来須看、報道姑娘、出来相看。
女答：門門相対、戸戸相当、通問刺史、是何祇当？[15]

まず男性が賊が来たら打つべきで、客が来たら出て会うべきで、出て来て見てくださいと言うのに対し、女性は何のご用かと聞く。それから次のように交わされる。

児答：心遊方外、意遂恒娥。日為西至、更蘭至此。人先馬乏、暫欲停流（留）、幸願姑娘、請垂接引。
女答：更深月朗、星闘斉明、不審何方貴客、侵夜得至門庭？
児答：鳳凰故来至此、合得百鳥参迎。姑娘若無疑□、火急返身却迴。

男性は、日も落ちて人も馬も疲れてしまったといって、しばらく停留することを新婦側の女性たちに請う。女性は、こんな夜中にどこの方が門前に来たのかと、まず男性の素姓と来意を問う。

女答：本是何方君子、何処英才？精神磊朗、因何到来？
児答：本是長安君子、進士出身、選得刺史、故至高門。
女答：既是高門君子、貴勝英流、不審来意、有何所求？
児答：聞君高語、故来相頭（投）、窈窕淑女、君子好求。
女答：金鞍駿馬、繡褥交横、本是何方君子、至此門庭？
児答：本是長安君子、赤懸（縣）名家、故来参謁、寮（聊）作栄華。

この女性の質問（盤問）に対して、男性はまず自分は長安の君子で、進士の出身、刺史に選ばれた身分であることを告げる。来意については、『詩経』の「窈窕淑女、君子好逑」の句を用いながら、君の高い評判を聞いてやってきたと答える。女性が「侵夜得至門庭」「至此門庭」と問うことから、これが家

の門前で問答が交わされたことがわかる。「姑娘」は新婦側を代表する女性たちであろう。[16] そうするとこの問答は新婦迎えの新郎側の男性と新婦側の女性たちで交わしたものと考えられる。ここで男性の来意を知ると、双方は続いて挨拶を交わし、女性はさらに以下の盤問を行う。

女答：夜久更蘭（闌）、星闘西流、馬上刺史、是何之州？
児答：金雪抗麗、遼（聊）此交遊、馬上刺史、本是沙州。
女答：英毛（髦）蕩蕩、游称陽陽、通問刺史、是何之郷？
児答：三川蕩蕩、九郡才郎、馬上刺史、本是燉煌。
女答：何方貴客、霞霄（宵）来至、敢問相郎、不知何里？
児答：天下蕩蕩、万国之里、敢奉来言、具答如此。
女答：人須之（知）宗、水須之願（知源）、馬上刺史、望在何川？
児答：本是三川遊奕、八水英賢、馬上刺史、望在泰（秦）川。

ここでも男性の素姓をもう一度詳しく盤問し、男性がすべて流暢に答え満足すると、女性は、「君登貴客、久立門庭、更須申問、可（何）昔（惜）時光」と、時が経つのを惜しんで男性が入ることを許すが、今度は男性が「並是国中窈窕、明解書章、有疑借問、可（何）昔（惜）時光」と、疑問があれば聞いてください、なぜ時が惜しいのか、と切り返す。それに対して女性は「立客難発遣、展褥舗錦床、請君下馬来、緩緩便商量」と、錦のベッドに布団を敷いたから、馬から下りてゆっくり話し合うことを提案する。問答の部分は以上で終わるが、さらに詩が続く。そこでは「論女家大門詞」、「至中門詠」、「至堆詩」、「至堂基詩」、「逢鑼詩」、「至堂門詠」の詩が詠まれ、大門から堂門に至るまでの途中にある物を取り上げて詩に詠むのである。最初の二首では「柏是南山柏、将来作門額」（「論女家大門詞」）、「團金作門扇、磨玉作門鐶、掣却金鈎鑼、拔却紫檀関」（「至中門詠」）と女家の門を褒めながら進む。続いては「彼処無瓦礫、何故生此堆？不假用鍬鑼、且借玉琶摧」（「至堆詩」）と、「あそこに瓦礫もないのに、なぜここに堆が生じたのか、鋤を貸してくれないならさらい（農具）を借りて打ち砕く」と詠む。また「鑼是銀鈎鑼、銅鐵相鉸過、瓆借鑰匙開、且放刺史過」（「逢鑼詩」）と、「鎖は銀の鈎鎖で銅鉄が交差して、鍵を借りて開け、刺史を通してください」と詠む。ここでは障害物の「堆」と「鑼」のことを詠むが、これも攔門の継続である。その後に続く「論開撒帳合詩」、「去童男童女去行座障詩」、「去扇

詩」、「詠同牢盤」、「去帽惑詩」、「去花詩」、「脱衣詩」、「合髪詩」、「疏頭詩」、「繋指頭詩」、「詠繋去離心人去情詩」、「詠下簾詩」は、婚礼の進行に伴って詠唱されたものといわれる。[17]「下女夫詞」について、伊藤美重子氏は「もともとは『下女夫』という習俗のための台本のようなものであったのが、広く婚礼に用いるために婚礼用の詩を付し、婚礼の次第も示すという〝書儀〟の性格を加えられていった」と述べている。[18]この作品の目的や性格などについてはまだ不明な点が多いが、婚礼を背景として成り立ったことは間違いないだろう。

こうした男女の問答の形式は唐代の小説『遊仙窟』にも見られ、程毅中氏は『遊仙窟』と「下女夫詞」の類似性を最も早く指摘し、「下女夫詞」の問答の部分にある、姑嫂二人が家で遠方から来た客を接待し、互いに問答し応答する場面は『遊仙窟』の内容と一致していると述べている。[19]

その『遊仙窟』では、最初は神仙の山についての描写があり、「日晩途遙、馬疲人乏。…古老相伝云、此是神仙窟也」[20]と、日が暮れて馬も人も疲れて張郎が神仙の岩屋に来たことを述べる。そこで彼は谷川の岸で洗濯している娘に出会い、最初の娘との問答が展開される。

見一女子向水側浣衣、余乃問曰、承聞此処有神仙窟宅、故来祗候。山川阻隔、疲頓異常。欲投娘子、片時停歇。賜惠交情、幸垂聴許。女子答曰、児家堂舍賤陋、供給単疎、只恐不堪、終無恪惜。余答曰、下官是客、触事卑微、但避風塵、則為幸甚。

張郎は「神仙の住む岩屋があると聞いて、神仙にお会いしたくてやってきました。多くの山川を越えてはるばるやってきたので、非常に疲れました。お宅に寄せてしばらく休ませてほしいです。」と、娘の家で休ませてくれと依頼する。すると娘は、「家がむさ苦しく、ごちそうも粗末で、ご満足頂けないでしょう。」といいながら、宿を惜しむ気持ちはないという。張郎は、自分は旅の身で、雨露をしのぎさえすればいいと答える。娘は「止余於門側草亭中」と、彼を門の傍らのかや葺きの亭に待たせて、しばらくしてから出てきた。そこで「此誰家舍也」（どなたのお屋敷ですか）と聞くと、娘は「此是崔女郎之舍耳」（ここは崔奥様のお屋敷です）と答え、「崔女郎何人也」（崔奥様はどういうお方ですか）と聞くと「博陵王之苗裔、清河公之舊族。容貌似舅、潘安仁之外甥。気調如兄、崔季珪之小妹。花容婀娜、天上無儔、玉体逶迤、人間少疋。」と、博陵王

の末裔で、清河公の旧族で、潘安仁の姪で、崔季珪の妹で、その美しさは天上に比べ得るものはなく、世の中に二人といない美人だと答える。

その後、奥から箏を奏でる音がが聞こえて、張郎は「従渠痛不肯　人更別求天」と、たとえその美女に拒まれても、天上へ行って代わりの人が探せるものですか、という詩を贈る。これに対して十娘は桂心をよこして「何処関天事　辛苦漫追尋」と、「どこが天上に関わりがあるのかしら、苦労してさがしてむなしいことだわ」と答える。そこで「舉頭門中、忽見十娘半面」（門内に頭をあげると、ふと十娘の顔が半分見え）、また一首を詠み「斂笑偷殘靨　含羞露半脣　一眉猶巨耐　雙眼定傷人」と、十娘の容貌を褒めながら、両目が見られれば気が動顛するだろう、と詠む。これに対して十娘は、「好是他家好　人非着意人　何須漫相弄　幾許費精神」と、「好きというのは他の方が好きなのね、私が意中の人ではないのに、どうしてつまらぬからかいをなさるの、なんというむだな気苦労ですこと」と答え返し、一旦彼を拒むのである。張郎は、ここでは十娘と対面することができなかったのである。

その後張郎は書状や詩を贈り、やっと十娘が出てきて二人は対面する。十娘は「不知上客従何而至」と、どちらから来たかと問う。張郎は「下官望属南陽、住居西鄂…」などと自分の出身、家柄について答える。十娘はさらに「上客見任何官」と官職を聞く。それに詳細に答えて「遂引入中堂」といい、ようやく奥の座敷へと通された。張鴻勛氏は以上の部分が「下女夫詞」の問答の部分と類似し、続く宴が設けられて五嫂もともに加わり、からかいながら戯れたり、詠物の詩を詠んだりする場面は最も賑やかな部分で、これは「下女夫詞」第二部分の嫁迎えの男性たちが女家の庭園に入ってから物を見て詩を詠むところと比べると小説の内容のほうが豊富ではあるが、その構造は共通するところがあり、最後に部屋に入って一夜を過ごす部分は「下女夫詞」の最後の部分に相当するという。[21]『遊仙窟』と「下女夫詞」の成立の前後関係は不明だが、小島憲之氏は「遊仙窟、その素材の一部は、当時、民間に伝はつてゐた婚姻的行事に仰ぎ、更に彼の文藻豊かな筆によつて潤色されたふしがみられる——敦煌変文「下女夫詞」などの原型がその素材の一つになつたものであらう」と述べている。[22]

『遊仙窟』では張郎と十娘は詩を用いて相手の情を探り、恋の思いを伝えたりする。こうした方法は今の少数民族の対歌にも行われており、程毅中氏は「『遊仙窟』のようなたくさんの詩を用いて唱和することは、おそらく民間の対歌の習俗を模倣

した」と述べ、[23] 石昌渝氏も対歌の方法を用いたと指摘している。[24]『遊仙窟』の作者がこうした民間の習俗をどこまで手本にしたかははっきり分からないが、当時の民間の対歌習俗や婚姻習俗の攔門の中に窺える盤問などを参考にしたことは充分考え得る。

『遊仙窟』は「下女夫詞」のようにはっきりと門前で問答が行われてはいないが、洗濯の娘が張郎を「門側草亭中」に待たせてから二人の問答のやりとりからは、十娘の出自と美貌が語られ、張郎と十娘との最初の詩のやりとりは、「舉頭門中」から窺えるように門を境にして行われたものと考えられ、十娘と張郎との出会いが「門」と大きく関わることもここに表れている。そして十娘は張郎の出身や家柄、官職などを詳細に聞くのは相手の素姓を盤問することであり、その答えに満足できた十娘は、次の段階の「中堂」へと導いたのである。このように『遊仙窟』にも攔門の名残が反映されていることは認められるのではないかと思われる。

五、『遊仙窟』から万葉集の門前歌へ

ここで、『万葉集』の門前の歌に戻って考えたい。家持の歌と『遊仙窟』との関係についてはすでに契沖によって指摘されており、[25]『遊仙窟』が家持の作歌活動においてテキストの一つとしてあったことは容易に想定される。家持の門前の歌二首の表現には、『遊仙窟』の直接的な影響は見られないものの、「娘子の門に到りて作れる歌」と題し、娘子の門前に到って断られることを設定するのは、張郎と十娘が最初に門を境にして詩を贈答し、十娘に拒絶されて対面を果たすことが出来なかった場面と通じ、『遊仙窟』を基盤にしていると思われる。巻四には家持が娘子に贈る歌はほかにも、「大伴宿禰家持の娘子に贈れる歌二首」（六九一、六九二）、「大伴宿禰家持の娘子に贈れる歌七首」「七一四～七二〇）、「大伴宿禰家持の娘子に贈れる歌三首」（七八三～七八五）があり、辰巳正明氏は「これらの歌の背後には、『遊仙窟』の影が見え隠れする」とし、「そこには〈遊仙窟遊び〉が存在したものと推測される」と述べる。[26] 辰巳氏の説を踏まえて考えれば、家持が娘子に贈った門前の歌も宴の場で展開された〈遊仙窟遊び〉の一環であったと考えられる。家持が門から返されることを詠み、門前の場面を設定して歌に詠むのは、ある習俗を反映しているが、その習俗とは婚姻習俗に見られる攔門のことと思われる。おそらく、家持は『遊仙窟』を通して唐の民間習俗の知識を理解したものと思われ

る。

また、湯原王と娘子との贈答歌は十二首展開されており、門前から返される状況を詠む歌は湯原王が娘子に贈った一首目である。湯原王は二首目で「目には見て手には取らえぬ月の内の楓のごとき妹をいかにせむ」（巻四・六三二）と、月の中の楓のように手に取ることのできない相手を詠むが、『遊仙窟』には張郎が十娘と詩をやりとりしながらも、面会することができず、「少時坐睡、則夢見十娘。驚覚攬之、忽然空手。」と、夢で十娘を見て、驚いて目が覚め手でつかまえようとしたが、手答えもなかったとの場面があり、そこから示唆を得たかもしれない。この湯原王の歌に対して娘子は「ここだくも思ひけめかも敷栲の枕片去る夢に見えける」（巻四・六三三）と、「夢」を以て返すことからも『遊仙窟』の知識が根底にあったと思われる。そして湯原王は「わが衣形見に奉る敷栲の枕を離けず巻きてさ寝ませ」（巻四・六三六）と、形見の衣を贈ることを詠む。張郎と十娘も別れる際に形見を贈り合い、張郎は「取相思枕、留與十娘以為記念」と、相思の枕を十娘に形見に贈り、「聊将代左腕　長夜枕渠頭」（これを左の手首に代えて、長い夜君の頭を支えてください）との詩を贈るが、湯原王がこの記事から暗示を得たことは充分理解される。[27] さらに、湯原王の「ただ一夜隔てしからにあらたまの月か経ぬるとこころいぶせし」（巻四・六三八）は、張郎と十娘が別れる際の十娘の「日夜懸心憶　知隔幾年秋」（昼も夜も心にかけて思うもの、あれから幾年たったかと）、張郎の「人去悠悠隔両天　未審迢迢度幾年」（人が去っていつしか二日隔ててしまった、いったい遠く何年過ぎるのであろうか）の詩に類似表現を見ることができる。そして娘子が贈った六四一番歌の「焼太刀のへつかふ」は「焼大刀乃　隔付経」と表記されて、難解な句であるが、漢字通りに解釈すれば刀が隔てたり付いたりすることをいうものである。張郎は「詠刀子」の詩を詠み、十娘は「詠鞘」詩を詠んでいるが、刀と鞘は男女の共寝を象徴するエロティックな表現である。さらに「剣」も登場しているが、これは張郎が十娘と別れる際に詠んだ詩に「両剣俄分匣」と出ている。これは南朝宋の雷次宗の『予章古今記』の記事が出典で、「この剣は雌雄の夫婦剣で、しばらく離れていたが、水に帰ってまた一緒にいることになった。張郎・十娘の離別も、この剣のように、しばらく待てば、再会の期もあろうと希望を示している」といわれており、[28] またの再会を願うものとして用いられたのである。娘子の「焼大刀」が如何なる意で用いたかは今後検証しなければならないが、二人の贈答歌に『遊仙窟』が下地にあったと考え

れば、ここに「焼大刀」が出てくるのも首肯される。このように湯原王と娘子との贈答歌にも〈遊仙窟遊び〉が見られ、その中に門前から返される歌も存在したのである。

六、おわりに

門前の歌は今でも中国少数民族の恋愛活動や婚姻習俗のなかに展開されて、男女によって対歌の形式で歌われている。その根源を遡ると古くからあった攔門の儀礼に辿りつく。敦煌遺書「下女夫詞」からは唐代の攔門の習俗が確認でき、また唐代の恋愛小説『遊仙窟』にも類似する内容が認められる。両作品の影響関係は不明だが、当時の民間の婚姻文化や対歌習俗などを素材の一つとして多く取り入れたことは確かであろう。こうした当時の民間の習俗文化を反映したものとして、一つは敦煌に、一つは中原から日本に渡ったのであろうと推測される。

そのような文化的反映は、天平時代の歌人である家持や湯原王の門前の歌に認められる。それらは門前の恋をテーマとした歌として位置づけられ、またそれは宴の場において贈答歌の一つの形式としてあったのである。家持や湯原王が門前という場面を設定して、歌を贈るのは、相手の歌を引き出そうとしたのである。その場面設定に直接的な情報を与えたのは、当時の知識人に愛読されていた『遊仙窟』であっただろう。家持や湯原王の作品には『遊仙窟』の場面を取り入れた歌が見られ、贈答の場では『遊仙窟』を基調としながら歌を楽しんだと思われる。その流れの中に門前の歌があったと思われるのである。

注

（1）拙稿「門前の歌—古代日本と中国を中心に」『歌垣と東アジアの古代歌謡』（笠間書院、二〇一一年）。

（2）注1参照。

（3）中西進『万葉集　全訳注・原文付』（講談社）による。以下同じ。

（4）辰巳正明「万葉集恋歌の再分類と復元の試み」『詩の起原　東アジア文化圏の恋愛詩』（笠間書院、二〇〇〇年）。

（5）楊通山等編『侗郷風情録』（四川民族出版社、一九八三年）による。筆者が中国語から日本語に翻訳した。以下同じ。

（6）『貴州民間歌謡』（貴州人民出版社、一九九七年）による。

（7）『侗族礼俗歌』（貴州人民出版社、一九八四年）による。

（8）呉存浩『中国婚俗』（山東人民出版社、一九八六年）、葉涛・呉存浩『搶婚』（中央民族大学出版社、二〇〇〇年）。

（9）引用は『清代広東筆記五種』（広東人民出版社、二〇〇六年）所収による。

（10）孟元老等著『東京夢華録』（外四種）（古典文学出版社、一九五七年）による。

（11）『夢粱録』は、孟元老等著『東京夢華録』（外四種）（古典文学出版社、一九五七年）所収による。

(12) 入矢義高・梅原郁訳注『東京夢華録――宋代の都市と生活』（平凡社、一九九六年）。
(13) 『旧唐書』（中華書局）。
(14) 張鴻勛「『遊仙窟』与敦煌民間文学」「関隴文学」第一集（甘粛人民出版社、一九八二年）、のち『敦煌俗文学研究』（甘粛教育出版社、二〇〇二年）に所収。
(15) 潘重規編著『敦煌変文集新書』下（中国文化大学中文研究所印行、一九八四年）。
(16) 注14参照。
(17) 注14参照。
(18) 伊藤美重子「敦煌本『下女夫詞』について」「お茶の水女子大学中国文学会報」第四号、一九八五年。
(19) 程毅中「関于変文的幾点探索」『文学遺産増刊』第十輯（中華書局、一九六二年。のち『程毅中文存』（中華書局、二〇〇六年）に所収。
(20) 八木沢元『遊仙窟全講』（明治書院、一九六七年）による。以下同じ。なお、詩の訳は張文成作、今村与志雄訳『遊仙窟』（岩波書店、一九九〇年）による。
(21) 注14参照。
(22) 小島憲之「遊仙窟の投げた影」『上代日本文学と中国文学――出典論を中心とする比較文学的考察――』中（塙書房、一九六四）。
(23) 程毅中「通俗小説与遊仙窟」『唐代小説史話』（文化芸術出版社、一九九〇年）。
(24) 石昌渝「伝奇小説」『中国小説源流論』（三聯書店、一九九四年）。
(25) 『契沖全集　万葉代匠記』（岩波書店）。
(26) 辰巳正明「家持の女性遍歴　恋の歌遊びについて」『万葉集の歴史　日本人が歌によって築いた原初のヒストリー』（笠間書院、二〇一一年）。
(27) 注22参照。
(28) 注20参照。